日仏哲学会 2026 年春季研究大会

一般研究発表要旨

上野隆弘

カンギレムにおける「社会的なもの」

ジョルジュ・カンギレムの主著である『正常と病理』は、もともと 1943 年に『正常と病理に関するいくつかの問題についての試論』というタイトルで出版されたことが知られている。この初版は、現在の『正常と病理』というタイトルで 1966 年に再刊される際、「正常と病理に関する新たな省察（1963-1966）」（以下、「新たな省察」）というパートが加えられた。三本の論文（前書きも含めると四本）から構成されたこのパートは、初版の議論を踏まえつつ、二十年という時を経て執筆されたものである。

本発表では、「新たな省察」のうち「社会的なものから生命的なものへ」 “Du social au vital”および「人間の有機的規範について」“Sur les normes organiques chez l’homme”という二つの論考を中心的に取り上げ、検討したい。これらの論文は、生命の哲学者として扱われるカンギレムが「社会的なもの」について考察したものとして知られている。とりわけ、フーコーをはじめとした後の哲学者との関係で関心を集めてきた。

だが、今回これらの論文を取り上げるのはそれだけが理由ではない。それに加えて、これらを取り上げるのは、そこで扱われている「社会的なもの」の議論が従来のカンギレム像を刷新する鍵になると思われるからである。『正常と病理』を中心とした思想は、哲学のみならず障害学といった他分野にも参照され現代でも影響を与え続けている。しかしながら、カンギレムを参照する研究の多くはこの哲学者を個体主義者としてのみ扱っており、図式的で一面的な理解にとどまっている。そこでのカンギレムは、社会的な次元を低く見積もった哲学者として特徴づけられている。だが、果たしてこの哲学者にとって社会的・集団的な次元は単に退けられるべきものだったのだろうか。そこには、個体と社会に関するもう少し複雑な議論があるのではないだろうか。「社会的なもの」の水準を検討することでカンギレム像の再考を目指したい。

以下では、はじめにカンギレムの規範概念に焦点を当てることで一般的なカンギレム像を確認する。それを踏まえてカンギレムの議論に含まれる問題点を指摘する（一節）。次に、「新たな省察」に含まれた二本の論考を検討する。それにより、1966 年の論考には 1943 年の著作にはない社会的なものの再評価が含まれていることを明らかにする。カンギレムは、フーコーとは異なる仕方で生命と社会を考えていることがわかるだろう（二節）。最後に、上記の議論からカンギレムがどのように問題点を克服しており、そこからどのようなカンギレム理解が可能なのかを示す（三節）。

赤羽　悠

記憶と「社会的なもの」
──アルヴァックス『記憶の社会的枠組み』の哲学的再検討

ベルクソンの下で学び、後にデュルケムに出会ってデュルケム学派の中心人物の一人となったモーリス・アルヴァックス（1877-1945）は、その「集合的記憶」の概念で知られ、記憶の社会学の先駆者としてしばしば取りあげられる。だがその記憶論は、単に記憶という領域の社会学であるにとどまらない。それは、「社会的なもの」とは何かという、社会学それ自体の存在理由にかかわる問いに、記憶という事象に注目しつつ答えようとした、ひとつの哲学でもある。このような観点からアルヴァックスを再解釈するための第一段階として、本報告ではその主著『記憶の社会的枠組み』の前半部を検討し、アルヴァックスにおいて「記憶」とはそもそも何であるのかを明らかにすることを目指す。

まず、『枠組み』前半部で、記憶の本質が「枠組み」にこそあるという主張がなされていることを確認する。過去を想起するということは、精神に現れてくるイメージを時間的・空間的に「位置づけ」ることであり、そのためには、集団に共有された日付や出来事といった基準点をもとに形づくられる「枠組み」が必要となる。記憶が社会的だといわれるのも、そのような「枠組み」の社会性ゆえである。ベルクソンが批判的に検討され、記憶と夢との違いが強調されるのもこの観点からである。

次に、このような「枠組み」概念がデュルケムのカテゴリー論に由来しており、それゆえ、「記憶」とは一種の集合表象である点をみる。この点をふまえれば、記憶が、個人としての人間の条件ではなく、社会生活の条件であることも理解される。記憶が問題となるのは、デュルケムのカテゴリーと同様、他者とコミュニケーションをとり、他者の行為と自らの行為を調和させる場面なのである。

最後に、以上の考察から、アルヴァックスが「記憶」と呼ぶものが、実は、社会的に記憶として認められたイメージのことであるという点を指摘する。アルヴァックスの見方では、精神に現れたイメージが実際に過去に生じた出来事の表象であることを保証する社会的プロセスがあるのであり、そのように保証されたものこそが文字通り記憶となる。したがって記憶は、本性上幻覚と区別されるわけではない。記憶を記憶と認識する精神の働き自体に、「社会的なもの」が介在しているのである。結局、ここでアルヴァックスが問うているのは、ある特殊な精神の働きとしての記憶が何かということではなく、精神に現れてくるあるイメージが記憶となるのはいかなる社会的プロセスによってなのか、ということである。

この問いは、「社会的なもの」の作用とはいかなるものか、という問いに行きつくだろう。実際、それが『記憶の社会的枠組み』後半部で論じられることであり、デュルケムとも異なるアルヴァックス独自の議論がより顕著に見られるのも、そこにおいてである。よってその検討が、次なる課題となる。

山本千寛

アンリ・ルフェーヴルの「動く住処」の思想
──五月革命期の「理論武装」を支えた前提的観念

しばしば「68 年運動の父」とも呼ばれるアンリ・ルフェーヴルは、そのイメージとは対照的に、自らを学生運動の「武装した観察者」として語っている。本報告は、当時のルフェーヴルが自らの「武器」としていた「動くもの」の視座を手がかりとして、1960 年代前後のテクストを読みなおし、同時代の彼の思想を下支えする前提的な観念を彼自身の表現に即して明らかにする。

第 1 節では、『日常生活批判II』における「生きること」と「生きられるもの」の関係に着目し、この生きられるものが「動く住処」という表現によって動的に捉えられている点を確認する。生きられるものは、生きることの諸可能性の一部が実現されたものであり、同時に、別様な生の可能性へとつねに開かれたままの過渡的な状態でもある。いま生きられている「日常的なもの」が不変の実体ではないことを示す日常生活批判にとって、この生きられるものに開かれた可能性は重要な拠り所となる。とりわけ本報告では、『日常生活批判II』前後の著作を参照することによって、この視座が、想像力をつうじて可能なものや不可能なものを探索する絶えざる「運動」としてのロマン主義と結びついていることを明らかにする。

つづく第 2 節では、この「運動」としてのロマン主義の視座が、1960 年代の社会批判においてどのような人間の想定と結びついていたのかを検討する。とくに重視するのは、『日常生活批判II』においてルフェーヴルが提起した問い――すなわち同時代人は、キェルケゴールの語る可能的なものを求めて叫ぶ男になぜ倣わないのかという問いである。本報告は、1957 年の論考「革命的ロマン主義」を参照しつつ、こうした主体の想定が「若さ」という概念と結びついて構想されており、五月革命の学生たちの異議申し立てに共感する下地をなしていたことを明らかにする。

第 3 節では、以上の「動くもの」をめぐる前提的観念やそれと不可分な人間観が、1960 年代後半の都市論へと接続される過程を、当時のハイデガー評価を参照軸としながら跡づける。とりわけ、キェルケゴールの語る男のように可能なものを求めて叫ぶことができ、しかもそうあるべき存在としての前提的な人間観が、「『詩人として住まう』（ヘルダーリン）ことができ、しかもそうすべきであるはずの人びと」という形で発展的に描き直さる過程を跡づける。またその結果として、「動く住処」という比喩としての可能性に開かれた「住処」の議論が、現実の「住まうこと」へと接続される展開を明らかにする。

以上の検討から、1960 年代のルフェーヴル思想には、世界や社会がつねに可能なものへと開かれた「動くもの」であるという前提的観念と――その運動の実現にとって不可欠な――可能なものを要求する主体の想定とが一貫して存在していたことが明らかとなる。

福田肇

「我在り」から「我実存す」へ
──ジャン・ナベールにおけるコギ トの問題

カントは、『実践理性批判』の第三章「純粋実践理性の諸動機について」（Von den Triebfedern der reinen praktischen Vernunft）において、道徳法則にもとづく義務の強制が、性向(Neigung)にもとづく動機を押し除けることで、義務にたいする「尊敬の感情」が主体の心をよぎる、という。

他方、20 世紀フランスの異端的な実存の哲学者ジャン・ナベールは、カントの動機論を、実存論的に読み替えるのだが、ナベール自身明言してはいないものの、そこに、同時にデカルトのコギトの独自な解釈を重ねていると思われる。

ナベールによると、「私の内なる神」ともいえる「根源的肯定」(affirmation originaire)の命ずる「在れ」(sois!)は、〈私〉という様式のもとで所有される（« je suis »=存在所有)。しかし、たとえば広大な土地の一部を囲っても、それが法的な次元で登記されないかぎりまだ私の土地にはならないのと同様に、〈我在り〉(« je suis »)は諸性向がそれぞれの目標をめざし満足を得る「世界」の次元へとみずからを拡張しないかぎり深い無自覚にとどまらざるをえない。

〈我有り〉は、純粋性向(penchant pur)として、自然的諸性向のただなかにそれらとは根っから相容れない何かとして芽生える。純粋性向は、カントのように、それらを押しのけたり叩き潰したりするのではなく、それらのエネルギーに取り憑きながら、この自然的諸性向に対する内的な抵抗、あるいは諸性向の満足の遅滞の相関者として、その抵抗や遅滞が現れるごとにみずからに気づき、消えるごとに死ぬ。つまり自然的諸性向が満足に達しないそのかぎりでのみ、それらに取り憑きつつもそれらには決して同化されず残基するみずからの存在を自認するのである。このことは、デカルトが、「この上なく老獪な欺瞞者」が、「私は或るものであると私の考えるであろう間」は、「決して私が何ものでもないようにすることはできない」（『省察』）と考えるとき、「私が何ものかである」ことを導出するためには、私を欺く「この上なく老獪な欺瞞者」をむしろ味方につけたのと同様、ナベールにおいて、諸性向が「この上なく老獪な欺瞞者」の役割を果たしているのであり、〈我在り〉が深い無自覚から目覚めるには、自然的諸性向を身にまとう必要があった。

純粋性向は、ただ諸性向を越える目的を目指すかぎりで、みずからを諸性向とは異なるものとしてはっきりとみずからの「在る」をとらえる。そのとき性向は、この目的に仕えるよう促されている。純粋性向が目指す目的とは、「私の私に対する不等性」を埋めること、言い換えれば摩耗した存在を埋めることであり、決して至らないその目的をめざす純粋性向は、それゆえ「存在することへの欲望」(désir d’être)と呼ばれるのである。

高橋輪

ミシェル・セールにおける Table Harmonique

二十世紀フランスの哲学者ミシェル・セールの哲学体系は、ライプニッツの独創的な読解を基盤として、組みあげられたものである。しかし彼の最も濃密なライプニッツ論である博士論文 Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques（1968）の研究は、その膨大さおよび翻訳の困難さなども相俟って、さらなる考究が必要な状況が続いている。

そこで本発表では、彼の博士論文の中核概念のひとつである Table Harmonique（調和図表）の概念的内実の解明とその概念的射程の測定を行う。というのも、彼の博士論文自体がライプニッツ的方法とは何かという問いをめぐったライプニッツ論という側面を有しており、Table Harmonique こそそのライプニッツ的方法のひとつの重要な表現だと見做されているからだ。この解明によってセールのライプニッツ解釈の主要な一端を明らかにし、よってその独自性を定式化することを目指したい。

発表は以下の三章から構成される。

第一章では、ミシェル・セールの紹介と今日におけるその研究状況、そして本研究の意義と構成について述べる。

第二章では、Table Harmonique と題された博士論文の第二部第二章を中心に、Table Harmonique の概念的内実の特定を試みる。Table Harmonique とは、基本的には座標平面や周期表などのように、二つの軸から構成され、なおかつその表内の個別の要素を生成する法則が明示化されているものだとされている。セールはこの法則性の明示化を調和の生成もしくは発見とも見做しており、この点において Table Harmonique はライプニッツ哲学における「調和」の問題に接近する。したがって、Table Harmonique の概念的内実の解明のためには、ライプニッツにおける調和の問題を、セールがどのように方法論的に把握し、また再定義したのか、ということを解き明かす必要があることとなる。発表では、この課題に対し、セールとともにライプニッツの初期論考である『結合法論』から遡ってライプニッツにおける図表的思考の変遷を検討することで答える。

第三章では、第二章を踏まえ、Table Harmonique がどのような射程を有するものであるのかを二つの領域において検討する。ひとつはセールのその後の著作との比較においてである。具体的には博士論文の段階では Table Harmonique と呼ばれていた思考法が、後の科学認識論などの著作ではどのように変奏されたのかを確認する。もうひとつは国内外のライプニッツ研究との比較においてである。既存のライプニッツ研究と比べた場合、セールにおけるライプニッツ的方法としての Table Harmonique という主張は、どのような独自性を有しているのか、その一端を検討する。

林 淳

バタイユにおける愛の諸相

ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）は、『無神学大全』として纏められる三冊の著作を通して「内的体験」という特異な脱自体験を探求している。バタイユに依れば、それは通常の知性が成立しえないような極限的な状況下で「非-知」としての主体が「未知のもの」と出会う「交流」の体験でもある。「交流」は「他者の死」に立ち会う現場で生じると見なされており、ナンシーやブランショはこの「他者の死」の主題を導きとして共同体論を練り上げている。彼らにとって重要なのは、「他者の死」が露わにする他者の我有化それ自体の破綻であり、ある種の「有限性」が分有されることによる「恋人たちの共同性」である。

発表者の見るところでは、「他者の死」、「有限性」、「恋人たち」という諸概念を互いに結び合わせている哲学的な源泉の一つは、「愛」の経験についてのバタイユの思索である。とすると、バタイユのテクストに立ち返って「愛」を再考することには、思考が形成される経験的な次元に則しつつ、バタイユ的な他者論／共同体論を厳密に捉え直させるような意義がある。だが、バタイユは「愛」という語を一義的に用いているわけではない。

そこで本発表が目指すのは、『無神学大全』を主たる読解の対象として、バタイユにおける「愛」の多義性を明示すること、さらに、多義的な「愛」の諸相に対して一貫した解釈を与えることである。第一に、バタイユにおいて愛するとは、他者を所有すると同時にその他者に所有されることを意味する。愛する他者が自己の命運を握る所有者であるからこそ、当の愛する「他者の死」は脱自的な「交流」の体験となる。第二に他者はどれほど愛しても我有化できない「到達不可能」な存在であり、愛は完了しえない情念である。これは第一の所有の意味に反するように見えるが、愛する他者が他者自身として死にゆく「交流」の現場において、他者はやはり所有していたはずの手から逃れている。「他者の死」は我有化の不可能性を露呈させ、当人を所有しているという認識を打ち砕くのである。第三に、愛に燃え上がる人間は、愛する「他者の死」それ自体を愛するに至る。「他者の死」はそれが「交流」であるという意味で愛すべきものである。バタイユにおけるこの異形の愛は、我有化できないとしても愛してしまい、自己の命運を握る他者がまさにその唯一の他者として死にゆくことへの愛、すなわち「好運」への愛と言い換えることができる。こうして「愛」を捉え直す試みは、バタイユ的な共同体論の議論に「愛」の経験に則した説明を加えると同時に、自他の関わり方から非人間的な境地までの問題系を一貫した観点から捉える立場を準備する。

林宮玉

エロティック文学における反復と過剰

本発表は、ジョルジュ・バタイユの「エロティシズムに関する逆説」（1955）を中心に、「エロティック文学」がいかにして語り得ないエロティシズムの表現となるのかを検討する。

バタイユにとって、エロティシズムとは存在の過剰であり、概念化できない体験である。それゆえエロティシズムについて語るエロティック文学は、以下の批判をしばしば受けてきた。すなわち、ほとんどのエロティック文学は陳腐な表現の機械的な繰り返しに過ぎず、常に存在の過剰を捉え損ねているという批判である。読者を驚かせるような過剰へと至るために、エロティック文学は機械的な反復を乗り越えなければならない。

だがバタイユは、こうした批判が過剰としてのエロティシズムの逆説を見過ごしていると指摘する。彼は自らが最高のエロティック文学と評価するサドの作品にこの逆説を見出している。サドは反復的な描写を重ねながら物語を極限まで押し進めることで、過剰としてのエロティシズムを描き出そうとした。だが、まさに過剰においてエロティシズムは語り得ないものとなり、サドは結果的にエロティシズムを破滅させている。無益な反復を乗り越えたところで、エロティック文学はかえって破綻してしまうのだ。したがって、エロティック文学は袋小路に陥っているように思われる。陳腐な表現を繰り返すポルノグラファーのままでいるのか、過剰を迎えて不可能なものとなるかである。

バタイユはクロソウスキーの『ロベルトは今夜』の記述を手がかりに、言語と体験としてのエロティシズムの関係そのものを言語論の観点から問い直す。エロティシズムと言葉の間にある表面上の対立は、言語活動を可能にするある分裂に由来する。クロソウスキーはこの分裂を、言語による事物への「裏切り」と捉える。この言語以前の裏切りによって、言語とその指示対象たる事物との関係が成立しているのであり、その関係には常に意味のズレが孕まれている。クロソウスキーの議論に基づいて、バタイユは以下の発想に至った。つまり、エロティシズムが過剰であるのは、それが言語で語られない沈黙だからではなく、むしろ言語の裏切りによって生み出される意味のズレである。

エロティック文学に固有の可能性は、言語の反復と体験の過剰を生み出すこの分裂に賭けているとバタイユは主張した。この分裂は言語によって意味のズレをあえて引き起こすことで現れるが、そこにこそバタイユはエロティック文学における反復の機能を再評価するのである。本発表は、エロティック文学を、反復から過剰への到達と、過剰の沈黙からの反復の再開という二重の運動として捉え直し、バタイユにおける「不可能なものの表現」の内実を明らかにする。

竹内 大祐

ジョルジュ・バタイユと不幸な意識
──バタイユのヘーゲル受容におけるジャン・ヴァールの影響について

本発表の目的は、ジョルジュ・バタイユのヘーゲル受容におけるジャン・ヴァールの影響を明らかにすることによって、バタイユにおけるコジェーヴのヘーゲル読解の特権性、あるいはコジェーヴ以前／以後の断絶という既存の前提を問いに付し、バタイユのヘーゲル受容の変遷、およびそれに基づく彼自身の思考の変遷を、1920 年代から 1930 年代にかけてのフランスにおけるヘーゲル受容の多様な展開のうちに位置付けることを目的とする。バタイユ自身が「ヘーゲルの著作との接触の真の始まり」と名指すコジェーヴのヘーゲル講義に先立つ 1929 年、すでにヴァールは『ヘーゲル哲学における意識の不幸』を著わし、「汎論理主義者」という硬直したヘーゲル像の刷新を試みていた。ヴィルヘルム・ディルタイ『ヘーゲルの青年時代』（1905）と、その弟子ヘルマン・ノールが編纂した『初期神学論集』（1907）によって明らかにされた青年期のヘーゲル像を大いに参照しつつ為されたこの仕事に、バタイユがごく稀にではあるが言及するとき、我々はバタイユのヘーゲルをめぐる思考において、コジェーヴとは異なる源泉があることを見るだろう。本発表では、バタイユのヘーゲル受容の変遷に関する文献学的な研究を踏まえたうえで、より具体的にヴァールの著述に入り込み、そこに現れる「悲劇的、ロマン主義的、宗教的」なヘーゲル像と、バタイユのヘーゲル受容の影響関係を明らかにする。

砂川優斗

いかに哲学を呈示するのか
──ナンシー『シンコペーションの 言説』を手がかりにして

ジャン＝リュック・ナンシーのカント論『シンコペーションの言説』（1976）はカントの哲学の書き方あるいは文体に焦点を当てたテクストであり、先行研究においてはそこでの「いかに哲学を呈示するのか」という問いの重要性が指摘されている。たしかに、この問いに対するナンシーの議論は『哲学の忘却』（1986）をはじめとしたナンシーの意味と意味作用に関する議論の先駆けとなっており、ナンシーの思考の変遷を明らかにする上でも重要であると言える。そこで本発表では、『シンコペーションの言説』におけるナンシーが「いかに哲学を呈示するのか」という問いに対して、どう答えたのか、そして哲学の呈示の仕方に関するナンシーの思考が、後の『哲学の忘却』などのテクストにおいて、どう引き継がれたのかについて明らかにする。

『シンコペーションの言説』でのナンシーは Dichtung（詩作）に対するカントの相反する態度に着目する。ナンシーによれば、カントの批判哲学において Dichtung はその哲学の源泉を かき乱すもの、その哲学の限界を超え出るものであり、カントはそれを自らの議論から排除しようとしていた。しかしながら、ナンシーの見立てでは、カントは自らを「詩人-哲学者（Dichter-philosophe）」としても呈示している。つまり、カントの哲学は自らに対する Dichtung という危険を完全に払いのけることができていない。そのため哲学は危険に曝され、自らの基盤を失神させ（syncoper）ながらでしか、自らを呈示することができないと、ナンシーは考える。すなわち、ナンシーによれば――そして、これこそが上の「いかに」の問いへのナンシーの応答なのだが――、哲学は自らの限界を画定しつつも、その限界に収まらない過剰な Dichtung に汚染されるという仕方で、自らを呈示するのである。

以上のような『シンコペーションの言説』における議論は、『哲学の忘却』での意味と意味作用に関する議論に引き継がれる。『哲学の忘却』において、ナンシーは限界づけられ、すでに決定されている「意味作用（signification）」と、その意味作用の限界を超え出ていくような「意味（sens）」を区別する。このことを踏まえ、ナンシーは、哲学は意味作用を欲望し、意志しつつも、その意味作用に対して意味が超過するという要請に従って、自らを規定するのだと主張する。『シンコペーションの言説』でなされた哲学の呈示の仕方に関する議論は、ここで意味と意味作用に関する議論と結びつき、再演されるのである。以上により、最終的に本発表は、限界を画定しつつも、限界を超過するという限界上での二重の運動こそが、ナンシーが一貫して考えていた哲学の呈示の仕方であるということを示す。

片岡一竹

不安の中での、不気味なものの 歓待
──ラカン、デリダ、バン ヴェニスト

本発表の目的は、エミール・バンヴェニストがその研究を方向づけた「歓待 hospitalité」の概念を媒介項とすることで、ジャック・ラカンとジャック・デリダとの関係という馴染みの主題に新たな角度から光を当てることである。

「歓待」はデリダの哲学にとって最も重要なテーマの一つとして知られる。フランス語の « hôte » という語が同時に「主人」をも「客人」をも意味しうるという両義性、さらに「歓待」と「敵対性 hostilité」という正反対の意味をもつ語が同一の語源から派生するという逆説に基づいた、「歓待されざるものの歓待」――この本質的な不可能性を帯びた歓待という概念は、デリダ思想の根幹を理解するうえで避けることのできないものである。

ところで、デリダとラカンとの間に存在する、還元不能な緊張を孕んだ関係もまた、少なからぬ数の先行研究の主題となっている。しかし、「歓待」という観点から両者を比較検討する研究は皆無に等しい。というのも、ラカンにもまた「歓待」の、それも根本的な異質性や不可能性を前提とした歓待の概念が存在するということそれ自体が充分に知られていないからである。しかしラカンは、10 番目のセミネール『不安』(1962-63 年)で、フロイトの「不気味なもの das Unheimliche」の概念――これもまた、デリダが折に触れて論じた概念として知られている――に基づいて「不安 angoisse」を再定式化しようとする際、まさに « hôte » の両義性に依拠するかたちで不気味なものの本性を説明している。このことから出発して、私たちが ラカンの不安論の中に一つの歓待論を読み込むことは決して不可能ではないし、また無益なことでもない。

1995-97 年のセミネール『歓待』(およびその抜粋からなる『歓待について』(1997 年))にて、デリダは « hospitalité» の語源に関するバンヴェニストの研究(『インド＝ヨーロッパ 諸制度語意集I』(1969 年))を頻繁に引用する。デリダの歓待論がバンヴェニストの再解釈によって導かれていることは明らかである。ところで、バンヴェニストはラカンにも浅からぬ影響を与えた。とりわけ、ラカンの精神分析理論の根幹を成す「シニフィアンの主体」概念は、バンヴェニストがロマン・ヤコブソンらから受け継ぎつつ発展させた「転換子(shifter) ないし指示子(indicateur)としての〈私〉」という概念を下敷きにしなければ理解しえないものである。ラカンが « hôte » の両義性に基づいて不安の対象(対象 a)としての不気味なものに言及するときにも、そこにはバンヴェニストの隠れた影響が見受けられる。したがって、バンヴェニストという媒介を経ることによって、デリダの歓待論とラカンの歓待論との同一性と差異を明示するための基盤が私たちに与えられるだろう。

徳永 怜

フーコー「サドに関する講演」における神の「邪悪さ」について
──サド解釈の連続性とクロソウスキーの影響

本稿は、一九七〇年に行われたミシェル・フーコーの「サドに関する講演」を主軸に、一九六〇年代の「侵犯」の称揚から一九七〇年代半ばの「規律」への格下げへと至るフーコーのサド評価の変遷を辿り、その深層に流れる理論的基盤の連続性を明らかにすることを目的とする。

先行研究では、一九七五年の対談「サド、性の法務官」におけるサドを規律の体現者とみなす否定的言及を、六〇年代の肯定的評価からの決定的な「断絶」と捉えるのが通説となっている。しかし本稿は、この変容を、サドをナチズムの予兆や歴史的惨劇の指標として絶対化するパゾリーニおよびアドルノらによる「神聖視」を解体するための戦略的格下げとして再確認する。フーコーはサドをあえて規律の位相へと引き戻すことで、その神話的な外皮を剥ぎ取り、サドが持つ固有の無神論を維持しようとしたのである。

この読解を支える鍵は、ピエール・クロソウスキーにおける一九四七年から一九六七年にかけての思想的転回にある。フーコーは、サドを「破壊的神学」の枠組みに閉じ込めていたクロソウスキーの初期の立場ではなく、自己同一性の廃棄を伴う「全面的無神論」へと跳躍した一九六七年の論文「悪虐の哲学者」に依拠している。ここで核心となるのが、神の「邪悪さ méchant」という概念である。

サドの無神論は、「神は邪悪であればあるほど、ますます存在しなくなる」という、デカルトの存在論的証明を反転させた論理を持つ。これはデカルトが神の誠実さと明証性によって払拭し、自己同一性を確立するために退けたはずの「悪しき霊」を、あえて神の属性（「邪悪さ」）として前面化させる試みに他ならない。善良な保証人としての神が、自らの属性である「邪悪さ」に適合し増幅されるほど、存在論的証明は逆転して神の実在性は消去される。これが、神の存在から諸々の倫理的な否定を導く西洋形而上学を反転させた、サド無神論の核心にある「存在論のレベルでの否定（神の非存在）」と「命令のレベルにおける肯定（すべてが可能である）」という論理である。この神の消失は、デカルトが主体を定立させたのとは対照に、直ちに主体の自己同一性の消滅を招くこととなる。そしてフーコーによれば、サドによる一連の「すべてを語り、記述せよ」という命令は、過剰な反復を通じて意味の重みを溶解させ、主体を「外」の空間へと消滅させる手続きとして機能するのである。

こうした「邪悪さ」による無神論と「反復」の構造は、七〇年代中盤以降の権力論とも共鳴する。エルヴェ・ギベールの分析に見られるように、性を語らせる要請を過剰な記述によって飽和させ、内側から転覆させる戦略は、規律の極限において「性の王権」を停止させるサド的な実践の系譜上にある。結論として、本稿が提示する〈規律的かつ無神論的なサド〉こそが、規律を内破し主体を消し去る「外の思考」の系譜として、フーコーのサド評価を一貫させるものなのだ。

樋口葵

フーコーにおけるストア派と初期教父
──Michel Spanneut, *Le stoïcisme des Pères de l'Église* の受容をめぐって

フーコー（1926-1984）は 1980 年代に古典古代を研究の対象としたことで知られている。『性の歴史』の第 2 から 4 巻が順に古代ギリシア・古代ローマ・初期キリスト教を調査したように、フーコーの古代論はこの 3 つの時期区分に基づいてなされている。本発表は、後期ストア派と初期キリスト教の関係についてのフーコーの記述を、当時のフランス古典学ないし教父学との関わりから文献的・系譜的に検討する思想史研究である。

これまでフーコーの古代論の生成や系譜については、古代哲学史家の Pierre Hadot の影響が Arnauld Davidson らによって指摘され、この方向で Daniele Lorenzini らが研究を進めてきた。しかしながら『性の歴史』2-4 巻及び 1980 年代のコレージュ・ド・フランス講義に付された詳細な編者註から明らかなように、フーコーは相当な数の二次文献を渉猟していた（例えば、Michel Spanneut, André Jean Festugière, Pierre Grimal）。それゆえ、「フーコーと Hadot」という問題設定の特権視はフーコー古代論の生成の限られた部分のみを強調することになりかねない。

以上の立場から、本発表は、『主体の解釈学』講義の編者によってフーコーが「相当に読んでいた」とされている、フランスの教父学者 Michel Spanneut の著書 *Le stoïcisme des Pères de l'Église*（1957）がフーコーに与えた影響の内実を検討する。まず、『主体の解釈学』『主体性と真理』においてストア派とキリスト教の関係について、フーコーが示す理解が Spanneut のものと一致していることを確認する。続いて、『肉の告白』におけるギリシア教父アレクサンドリアのクレメンス読解において、Spanneut が言及されることなく批判の対象となっていることを論じる。そのさい問題となるのは、クレメンスの『訓導者』をストア派道徳との連続と見る（Spanneut）か、断絶と見る（フーコー）である。Spanneut によれば、クレメンスの実践道徳についての勧告は後期ストア派を引き継いだものである。これに対してフーコーは、両者に一定の類似を認めつつ、クレメンスが独自の宗教的立場を取っていることを強調する。このフーコーの解釈について、本発表の仮説として、フーコーが、クレメンスのうちに、『肉の告白』においてアウグスティヌスへと収斂するキリスト教道徳とは異なる道徳モデルを見ようとするからではないかという読解を提示する。

谷野吉隆

『性の歴史』はなぜ古典古代期の調査を必要としたのか
──ミシェル・ フーコー『肉の告白』における倫理の変容プロセスについての一考察

本報告はミシェル・フーコーの著作『性の歴史』第四巻(『肉の告白』)がいかなる意味で「歴史」研究と呼びうるのかを検討するものとなった。近年の研究はこの問いに対し、近代的な統治の技法や「統治性 gouvernementalité」――これらは『肉の告白』と同時期に彼が講義録などで論じていたテーマでもある――と彼の古代キリスト教研究との結びつきを指摘してきた(e.g. Harcourt, B. E. (2021).“Foucault’s Keystone: Confessions of the Flesh”, In *Foucault Studies*)。しかしこの「統治性」に着眼した『肉の告白』読解は、フーコーが古代ギリシアからキリスト教に至るまでの倫理の変遷をいかに理解していたのかについて、ほとんど説明できていなかったように思われる。

そこで本報告は、なぜアウグスティヌスは四世紀の教父たちと同じ概念や実践を共有しているにもかかわらず、そこから近代まで続くような新たな考え方を出現させるに至ったのかという問いを検討した。一節ではまず、彼が『肉の告白』の描く倫理思想史において占めている位置を確認した。同書では、彼は「法権利 droit の主体」という考え方を提起したことで、近代まで続く法的な規範設定を用意したとみなされている。しかしフーコーの読解に従えば、アウグスティヌス自身にとっての問題は、あくまでも夫婦生活と修道院の生活という二つの生活スタイルとを統合することにあった。より具体的に述べれば、四世紀までの教父哲学は、修道院における実践を中心的な考察の対象としてきており、アウグスティヌスはその考察で用いられてきた諸概念を夫婦関係に転用したのだとされる。こうした理論的文脈のなかで、法権利という近代的統治の母型が、図らずも現れることとなった。

このようにアウグスティヌスの分析では、彼自身の教説の同時代的な狙い(夫婦関係と修道院の生活スタイルの統合)と、それとは区別される理論史的な価値(近代的・法的な統治の母型)という二つが考察の主題となっており、その両者の間の齟齬が問題となっているように思われる。二節ではこの齟齬を理解する補助線として、『性の歴史』第二巻(『快楽の活用』)の序文が提示する方法論を検討した。その結果、彼の歴史研究では、言説や実践が共有する同時代的なテーマ系――これは「問題構成＝問題化　problématisation」と呼ばれる――とその推移が、調査の主な焦点となっていることが明らかになった。

この問題構成の推移という観点から、三節では、『肉の告白』がアウグスティヌスと同時代に夫婦関係の規範を考察した教父として取り上げているクリュソストモスの教説を検討した。そして、両者のあいだにはテーマ系の推移や用語法の批判的な継承関係が見出されていることを解明した。

釜田興

「人間」を終わらせるニーチェ
──初期フーコーの人間学批判とニーチェ解釈

ミシェル・フーコー（1926-1984）が 1960 年代の仕事において、「人間学 anthropologie」という主題を集中的に論じていたことはよく知られている。例えば、彼の博士論文である『狂気と非理性（狂気の歴史）』（1961）の第 5 章においては、19 世紀の精神医学が真なる人間の本来的な主体性の喪失として狂気を定義したこと、そして疎外状態としての狂気を介し人間の真理に到達しようとする逆説的な思考が現れたことが「人間学的円環」として分析されている。また、副論文として提出された「カントの『人間学』への序論」においても、カントの指摘した「超越論的錯覚」が、有限な人間の本性、「真理の真理」として理解されるようになるという事態が「人間学的錯覚」として論じられている。そしてこれらの議論が『言葉と物』（1966）において提示される、経験論的―超越論的二重体としての近代的「人間」がいかにして成立したのか、についての分析に結実することは言うまでもない。

これらのテクストにおいて共通しているのは、いずれもニーチェがこの人間学的思考の図式を乗り越える存在として位置付けられていることである。『狂気と非理性』における記述は必ずしも多くないが、「『人間学』序論」と『言葉と物』においては、ニーチェの「神の死」や「超人」といった概念が人間学的思考に基づく「人間」に終止符を打つものとして提示されている。

さて、近年 1954 年から 1955 年にかけてフーコーが高等師範学校で行った講義のノートである『人間学の問い』（*La question anthropologique*, 2022）が出版されたが、ここでも上述のような、「人間学」的思考とそれを終わらせるニーチェ、という図式が示されている。ここでフーコーは、古典主義時代において不可能なものであった人間学的思考がカント以降、ヘーゲル、フォイエルバッハ、ディルタイを経て成立し、やがてニーチェにおいて終焉を迎える過程を描き出しているが、ニーチェについては三章構成のうちの最後の一章「人間学の終焉」をまるごと割いて論じている。

本発表は、まず『人間学の問い』の位置付けや全体の要旨を確認し、次に第 3 章を読解することで、フーコーにおいてニーチェの思想が「人間学」的思考の諸前提を解体する仕方を明らかにするものである。特に、このフーコーのニーチェ論については、編者がヤスパースの『ニーチェ』（1936）や『ニーチェとキリスト教』（1938）からの大量の引用を指摘している。我々は『人間学の問い』のニーチェ論の各節の議論に対するヤスパースのニーチェ論の影響を具体的に示しながら、フーコーがヤスパースの一部の議論に対し距離を取った可能性について示す。

仲宗根大介

「たくさんの「私」たち」の系譜学
──フーコーの歴史思想におけるニーチェとヘーゲル

本発表はフーコーの歴史思想「系譜学」がもつ議論構成をその源流をなすニーチェの歴史思想との関わりから明確化するものである。

同趣旨の研究では 1971 年の論考「ニーチェ、系譜学、歴史」の読解という手立てがとられてきた。そこでは、〈超歴史的な観点をとる主観性を前提とし、歴史を起源や目的のある必然的なものとみなす歴史探究〉としての「歴史学」との対照から、「系譜学」が〈超歴史的な観点を拒絶し、歴史を起源や目的のない偶然的なものとみなす歴史探究〉として理解されてきた。こうした消極的理解には系譜学の積極的要素の見落としが 2 つある。①系譜学と歴史学が「歴史感覚」の「使用法」で区別されること。②歴史学を「変貌」させて系譜学にするという論点があること。

こうした見落としは資料的制約による。「ニーチェ、系譜学、歴史」は、フーコーが系譜学をもっとも濃密に論じた資料ではあるが、論述が圧縮的だったり断りのないニーチェ引用があったりと議論展開が不透明になっているのである。こうした制約は、しかし、今日では乗り越え可能である。2024 年にフーコーの遺稿群から編纂された『ニーチェ：講義、会合、仕事』には 1969 年のニーチェ講義草稿が含まれている。そこでは、71 年のニーチェ論の内容が敷衍されていて、参照されるニーチェのテキストも同定可能になっている。そこではまた、「歴史学」ということで系譜学の対抗馬として想定されていたものがヘーゲル的な「現象学」であったことも確認できる。本発表は、上の 2 点に着目しつつ、この資料を元にして、「系譜学」の積極的理解を試みる。

行論は以下。まず、歴史感覚が西洋近代の歴史的文化的多元性に出自をもつという論点を確認することを通じて、歴史感覚がもたらす自己認識と歴史認識の反省的循環への 2 つの対応仕方として現象学と系譜学を特徴づける筋道を切り開く。次に、この筋道に沿って現象学と系譜学を対照的に特徴づける。一方の現象学は、反省がもたらす「私＝我々」という形象のもと、多元性を乗り越えて有機的全体性に基づく統一性もたらそうとするものとして特徴づけられる。他方の系譜学は、反省がもたらす「たくさんの「私」たち moi multiples」という特異な形象のもと、多元性そのものを肯定的に際立たせようとするものとして特徴づけられる。最後に、系譜学が「ほどかれた現象学」と呼ばれていることに着目しながら、〈現象学を「ほどく」ように変容させることで系譜学をなす〉ということの実例をフーコーの 1977 年の論考「汚辱に塗れた人々の生」に求める。

こうした試みから、フーコーの歴史思想がニーチェとヘーゲルの緊張関係を織り込みながら展開されているということが洞察されるとともに、「歴史感覚」がもたらす「強度」という論点をめぐってフーコーがドゥルーズやクロソフスキーと共闘関係にあったことが示唆される。

藤貫裕

九鬼周造の押韻論におけるリズムの問題を巡る一考察
──ヴァレリー・ベルクソン・クルツィウス

本発表では、これまで十分検討されてこなかった九鬼周造のベルクソン受容を扱う。具体的に言えば、九鬼周造の押韻論におけるベルクソンの「純粋持続」解釈について、その関連で九鬼が言及する、エルンスト・クルツィウス（Ernst Curtius, 1886-1956）によるポール・ヴァレリー（Paul Valéry, 1871-1945）論を踏まえて検討する。そこでまず第一節では、九鬼の押韻論を、特に九鬼がベルクソンの純粋持続概念とも結びつけて論じる押韻の音楽的機能に関する論述に着目して、概観する。その際、九鬼が「文学の形而上学」や「日本詩の押韻論」といった諸著作の中で、一貫して押韻における音の反復によるリズムの生成を重視している一方、その反復における周期的な音の同一性を強調する論述と、ベルクソンの「純粋持続」概念を援用しながら、反復によって統一性とともに音的ないし意味的差異も生成するという側面に着目する論述とが併存していることを、確認する。次に第二節では、九鬼が「日本詩の押韻」の中で、リズムの周期的同一性を重視する前者の立場を強く押し出した上で、ヴァレリーの定型押韻詩「蛇の素描 Ébauche d’un serpent」を高く評価している箇所を扱う。ここでは、九鬼がクルツィウスの同作品評を自らの解釈を補強するために引用しているが、クルツィウス本人の論述は必ずしも九鬼の立場と同一でないことに、特に注意を促す。それを踏まえて第三節では、クルツィウスが「蛇の素描」における押韻を「持続的現在」と特徴づけていることをおさえた上で、そうしたクルツィウスの特徴づけは、リズムによる差異を孕んだ統一性の生成という、ベルクソンを踏まえた九鬼の後者の立場、ひいては「蛇の素描」における押韻の実状とよく合致していることを示す。先行研究では、第二節で論じるような九鬼自身の押韻詩解釈の傾向性、さらには全く同一の事物が無際限に回帰する形而上学的時間と自らの押韻論とを九鬼が好んで結びつけることから、押韻におけるリズムの周期的同一性にまつわる論述が専ら取り扱われてきた。それに対して、九鬼の押韻論にはベルクソンに基づく別のリズム解釈があること、そしてその解釈の方が他の思想家による作品分析、さらには作品そのものの特徴づけとも合致することを示す点に、本発表の意義が存する。

岡嶋隆佑

意識と実在
――ベルクソン知覚理論の起源と生成

ベルクソン『物質と記憶』第一章で用いられるイマージュ概念については多くの研究が存在するが、この概念とそれによって展開される同書の知覚論の起源を問題にするような論考は少なく、ベルクソンの知覚論の具体的な形成過程を明らかにするような試みはほとんどなされていないという現状がある。同書へのジャン・ジョレスの博士論文の影響を示したカミーユ・リキエの論考や、ジェイムズが『心理学原理』で示した機能心理学の文脈に位置づけるステファヌ・マドルリユーの一連の考察は、この点に関する貴重な先行研究ではあるが、いずれも『物質と記憶』の形成過程を主題としたものではないため、それぞれの著作からの影響を正確に捉えきれていない部分がある。本発表では、これらの研究を発展・総合させる形で、同書の知覚論の生成のプロセスに関するいくつかの仮説の提示を試みた。具体的な内容は以下のとおりである。

（1）まず、昨年度の本会での発表内容を踏まえ、『試論』出版後にジョレスが『感覚世界の実在性について』で展開したベルクソン批判が、『物質と記憶』の第四章の形成にどのような影響を与えたかを確認した上で、（2）同章の「持続と緊張」の議論やそこに含まれる汎心論的な主張は、ジェイムズの『心理学原理』第六章のマインド・ダスト説批判との関連で生じたものではないかという仮説を提起した。こうした見立てが正しいとすれば、（3）リキエらのイマージュ論の起源についての研究（ジョレスのショーペンハウアー批判の射程を拡張したものだという解釈）は、一定の修正を迫られることになる（脳という部分は世界全体を生み出し得ないという論理はジョレスからの借用だとしても、物質それ自体が意識的だという形而上学的主張は『心理学原理』の批判的な検討に由来する）。

（4）以上を前提として、ベルクソンの知覚論の枠組みが、『心理学原理』に含まれるさまざまな立場や知見を取り込むことで形成されたのではないかという仮説を提示した。（a）意識の選別性、（b）脳の機能（中央電話局の比喩を含む）、（c）延長の知覚の三つの論点について、ベルクソンとジェイムズのテクストを対照することによって、『物質と記憶』の純粋知覚理論は、上述の汎心論的前提と（a）および（b）の組み合わせから帰結するものであること、さらにその理論を想定反論から擁護する目的で書かれた（c）においても、ジェイムズの議論が援用されていることを確認した。

結論として、『物質と記憶』の知覚論は、『試論』直後に相次いで出版されたジェイムズ『心理学原理』（1890）とジョレス『感覚世界の実在性について』（1892）のそれぞれに由来する思考の流れが合流した結果生じたものであるという見通しを示した。

細田一益

映画における内在
──「夢」の理念から見た現代日本映画

本発表は、映画における〈内在〉の概念をめぐり、「時間」あるいは「生」の表現を哲学的に考察するものである。フランス・パリ第八大学に提出した博士論文『L'immanence du ciné ma（映画の内在──小津、黒澤、溝口、タルコフスキー)』（副題：『時間の表現の試論』, 2025）では、ベルクソンとドゥルーズの時間論を基盤に、映像がいかにして生の持続を可視化するかを探究した。小津安二郎、黒澤明、溝口健二の作品に加え、タルコフスキーの映画を比較対象とし、映像の内在的運動を〈時間の厚み〉として捉え直すことを試みている。

博士論文の核心は、映画を単なる再現の手段ではなく、「生成としての現実」を直接に表現する場として理解、それを映画のリアリズムとする点にある。そこでは、死や残酷なもの、夢、記憶といったモチーフが、時間の断絶ではなく連続のうちに描かれる。とりわけ日本映画では、死が静止ではなく「生の延長」として示されることに独自性があり、その表現を哲学的枠組みのなかで再検討することが本研究の目的であった。

本発表「内在としての映画――『夢』をめぐる 1980 年代の日本映画」では、この議論をもとに、1980 年代日本映画における〈夢〉の理念を手がかりとして再構成を試みる。映画はベルイマンがいうように「夢」である。しかしその夢は、いったい何を意味し、どのように表現されるのか。大林宣彦や森田芳光の作品に見られるように、現実と夢、記憶と現在が溶け合う時 間構造の中に、内在的な〈生〉の感覚が立ち上がる。他方で、夢の表現に失敗した多くの映画も存在する。それはいかなる意味で「失敗」と言えるのか。本研究は、その問いをジル・ドゥルーズの概念である〈内在〉から探究するものである。

映画が生の運動そのものとして立ち上がる瞬間を描き出すこと――それが本研究の核心であり、内在の哲学を映画という表現媒体を通して思考する試みである。

田中佑樹

ガタリとドゥルーズの『哲学とは何か』

フェリックス・ガタリとジル・ドゥルーズによる最後の共著『哲学とは何か』(1991)は、フランソワ・ドスによる誇張した伝記作業によってドゥルーズ独力によるところが大きいと誤解されてきた。しかしながらそれは事実ではなく、他の共著群同様の共著作業があったことが明らかになっている。

例えばカルロス・セゴヴィアが”Guattari beyond Deleuze”(2024)で示しているように、IMEC に所蔵されたガタリ・コレクションには『哲学とは何か』の草稿群が存在する。特にガタリが『分裂分析的地図作成法』(1989)で展開した４機能素の議論が、『哲学とは何か』と深く関わっている。そこで IMEC でのさらなる資料調査をもとに、どの程度『分裂分析的地図作成法』あるいは『カオスモーズ』と『哲学とは何か』を連続的に読みうるかを検討する。

他方ガタリの 1980 年代のセミナー群からも『哲学とは何か』に続く思想を読み取ることができる。特に近年刊行された『les Trialogues』(三者問答)の中では、ガタリが『哲学とは何か』 の「合-間」(entre-temps)の概念を独自に展開している。『分裂分析的地図作成法』(1989)でも時間論に多くが割かれており、「合-間」概念など『哲学とは何か』と接続させながらガタリの時間論を整理する。

金敏哲

内在平面としての「思考のイメージ」
──ドゥルーズにおける「内なる外部」と権利問題

ドゥルーズの哲学において、前期から後期まで貫く重要な主題の一つが「思考のイメージ」であることはいうまでもない。本発表ではまず、「思考のイメージ（image de la pensée）」 に関わる権利問題に焦点を当てたい。こうした権利問題を論じた上でつづけて、以下の問題を提起する。それは、後期ドゥルーズが内在平面と名付ける前―哲学的なものとしての「思考のイメージ」が、どのような効果を持つだろうか、またそれが思考のもっとも内奥でありながら絶対的外部であるのはどのような関係であるのかという問題である。

『差異と反復』においてドゥルーズは、プラトン、デカルト、カントといった古典的な思考のイメージを批判した。というのも、これらの「イメージ」は暗黙の前提として、権利上（en droit）「前提なき開始」やドクサと独断の排除を純粋思考に要請しつつ、結局、それ自身が求めようとした純粋思考の本質と全く逆な方向に導いてしまうからだ。ところが、「権利上」という観点そのものが、ドゥルーズによって否定されているわけではない。ドゥルーズにおいて、「イメージなき思考」といった概念は、アルトー的思考の「無能力」によって、思考における「権利上」の困難として理解されている。さらに、『哲学とは何か』においても、「思考のイメージ」は権利上要求される無限運動として思考を方向づけるのだとみなされている。では、我々はいかなる権利を持って真の差異を思考しなければいけないのか。それは単なる狂気、愚劣、といったものを権利上の思考の構造として受け入れるだけで十分なのか。そして、こうした従来カントから由来する権利問題は、ドゥルーズの哲学のうちでいかなる役割を果たしているのか。

次に、本発表では「前―哲学」的なものとしての「思考のイメージ」の位置づけを内と外、概念と非―概念、思考と非―思考（non-pensé）の配置として捉え直すことを試みる。かつて 『差異と反復』においてドゥルーズは、「思考のイメージ」を「前哲学」的なものとして捉えていた。『哲学とは何か』では、「思考のイメージ」を哲学が提示する三つのエレメントの中の一つとして、すなわち、哲学が描かなければならない前―哲学的な平面（内在平面）として定義している。ここでの哲学と「前―哲学」の関係は、内部と絶対的外部の関係として捉えられるのではないか。内在平面＝「思考のイメージ」は思考の最も内奥でありながら、同時に絶対的外部として思考を強いる「非―思考」である。この「内なる外部」は、ブランショ（『終わりなき対話』）が示す〈内奥と侵入としての外〉の問題系と照応すると同時に、ドゥルーズの『フーコー』における「褶曲（plissement）あるいは思考の内（le dedans de la pensé e）」という主題とも響き合う。本発表では以上の視点から、「思考のイメージ」がいかなる意味で外でありかつ内であるのか、またそれがどのような権利において思考を強いるのかを問いたい。

得能想平

当時のアカデミックな文脈への介入として『経験論と主体性』 を読み直す

ジル・ドゥルーズの初期のヒューム論『経験論と主体性』は、ドゥルーズの思想的発展を考えるうえで重要である。1940 年代における最初期のドゥルーズの論考は、「可能世界」の表現 や「アプリオリな他者」といった着想において、ジャン・ポール＝サルトルやハイデガーからの影響が見られる。しかし、同時期に修士論文として執筆された『経験論と主体性』にいて取り上げられるのは、上記の著者からは比較的距離があるヒュームであり、こうしたドゥルーズの態度にはしばしば断絶が見いだされてきた。

しかし、近年の研究は、まさにヒューム論に賭けられていたものが当時のフランスのアカデミックな文脈への応答であることを明かしている。フォードによれば、『経験論と主体性』 は、ヘーゲルをめぐるジャン・ヴァールとアレクサンドル・コイレとの（ないしコイレの立場を引き継ぐジャン・イポリットとの）論争に対して応答する著作である(Ford 2022)。またシャモアによれば、『経験論と主体性』と用語法が重なる同時期の「本能と制度」には、ジョルジュ・カンギレムの議論を踏まえた生理学的感性論の探求が見られる(Chamois 2023)。

『経験論と主体性』やそれに関わる議論にアカデミズムへの応答を見いだすこうした動向を踏まえるのであれば、われわれは『経験論と主体性』のうちに、まさに当時のアカデミズムの議論において注目されていたサルトルやハイデガーを扱う 1940 年代の論考との連続性を見いだすことも不自然ではないだろう。

本発表は、『経験論と主体性』を当時の文脈から改めてその試みの内実を評価するものである。あらためて読み直すのであれば、われわれはこの著作のうちに当時の文脈への応答を示唆するさまざまな側面を見いだすことができる。こうしたもののなかでよく知られたものとしてはヴァールの『英米多元論哲学』への参照を示唆する「関係の外在性」の議論であるが、これだけを単独で扱うことはおそらく本発表の目的を達成することを可能にしない。ヒュームの経験論をコントと比較して正当化すること、ヒュームに読み込まれる錯乱と道徳性という二重の自我の問題、ライプニッツ、ベルクソン、フロイトがヒュームの比較項と見なされること、こうしたことを当時の文脈において位置付けたうえで、さらに当時の英語圏・フランス語圏のヒューム研究の進展との比較において論じることが重要である。本発表が試みるのはこうしたことである。

Chamois, C. (2023). La sensibilité différentielle. Psychologie, éthologie et sociologie dans Instincts et institutions de Gilles Deleuze. Dialogue: Canadian Philosophical Review, 62(2), 323-355.

Ford, R. (2022). Experience and Empiricism: Hegel, Hume, and the Early Deleuze. Studies in Phenomenology and Existential Philosophy. Evanston, IL: Northwestern University Press.